









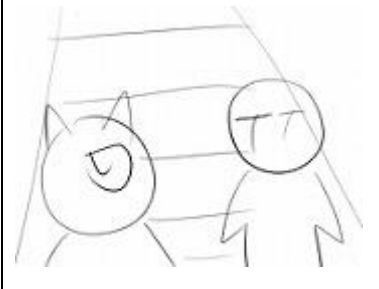
場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
1		庭園が見える廊下。 お凜様一行が、奥富に連れられている。 奥富「そんな広くないですが、ざっと館内を案内させていただきます」	
2		奥富「このお庭はね、秩父の山が借景で見えるように造られていまして、四季を通じて楽しめますよ」 お凜様「いつも山ん中におるが、麓から眺めるんもええのう」	
3		奥富「この先、突き当り左にお庭の出入り口があります。右にお手洗いと自動販売機があります」	
4		奥富「で、廊下の横にある大広間が、朝夕の食事処です。ご要望がない限り、和食となります。別途ご昼食もお受け致します」 奥富が進んでいく。	
5		奥富「食事処の奥にもうひとつ大広間がございまして、遊戯場となっております」 お凜様「遊戯場？」 奥富「当館では、お客様へのお楽しみとして、日本文化を継承すべく伝統的な賽札遊びを提供致しております」	


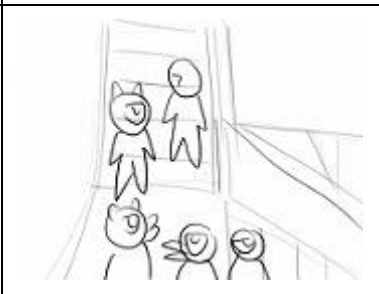
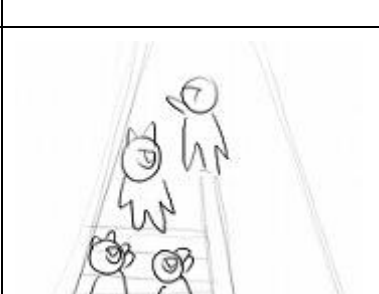

場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
6		お凜様「賽札遊びとは、博奕じゃないか」 奥富「いえ、博奕はやっておりません。金品を賭けずに、純粋に楽しんでいただくための、合法的な遊戯でございます」 お凜様「わしは賽札遊びは結構嗜む方じゃ」	
7		奥富「なら、是非ともお楽しみいただいて」 お凜様「今は有事じゃがな」 奥富「そうでした」	
8		お凜様「なんでこの時代に賽札遊びなんて古風なもんを？」	
9		奥富「いやね、当館の前身は、その昔、入間川の宿場町にあった本物の博奕場でした。主人は由緒正しい伝統的な博徒一家の子孫でございます」	
10		お凜様「博徒だったんか」 奥富「大昔から博奕は表向きご法度でしたから、明治の初めに博奕をやめて、合法的な遊戯場として営業を始めたそうで」 お凜様「賢明じゃな」	



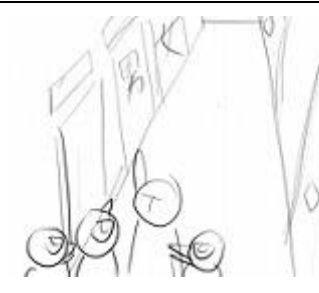


場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
11		お凜様が襖を開いて遊戯場を覗く。 奥富「で、渡世人の世界では、旅人に一宿一飯の世話をする習慣がありましたから、観光客向けに旅館の営業も始めたんだとか」 お凜様「合理的じゃな」	
12		奥富が階段に向かう。 奥富「ただ、元の入間川の宿場は観光の需要がないので、山や川が近くて自然に親しみやすいこの地に移転したんだそうで」 お凜様「その方がええじゃろう」	
13		お凜様が襖を開いて食事処を覗く。 奥富「そういう流れなので、私らは真っ当な堅気ではございますが、『関東入間屋一家』という博徒時代の看板を継承しております」 お凜様「どうりで、すんなりと神儀が通じるはずじゃ」	
14		一行が階段を上っていく。 奥富「お凜様はどうして口上をご存じで？」 お凜様「そもそも、あの口上の作法は、わしら神道の世界のもんじゃぞ」 奥富「そうなんですか？」 奥富が階段で立ち止まる。	
15		お凜様「わしら神々は、時を定めて民の家々を訪ねるとき、素性を明らかにせんと信じてもらえん。じゃけえ、軒下に立って独特の言い回しで名乗りの口上をして、証を立てるんじゃ」	





場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
16		奥富「まんま仁義じゃないですか」 お凜様「博徒や的屋が真似をしたんじゃ。昔から祭礼で神道と結びつきが強いからのう。 盃事なんか完全に神道じゃ」 奥富「なるほど。言われてみると」	
17		お凜様「いつからか、儒教の『仁義』との混同が起きてしもうたが、本来は『神道』の『儀礼』で『神儀』じゃ」 奥富「へえ～」 一行が進んでいく。	
18		お凜様「今じゃすっかり廃れてしもうたが、昔は家ごとに『神迎え』『神送り』のしきたりがあったな、主と妻は神儀の応対をできんといけんかったんじゃ。博徒や的屋だけのもんじゃない」 奥富「へえ～」	
19		一行が二階廊下に立つ。 奥富「仁義の起源は知りませんでしたかね、うちの主人は結構信心深くて、神仏の祭祀は大事にするんです」 廊下を進んでいく。	
20		奥富「ほら、ここに祭壇があるんですよ。お祀りしてるのはごちゃ混ぜですけど、なんか呪文みたいの唱えたりしています」 お凜様「在家信仰の象徴みたいじゃな……」	

場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
21		奥富「修験道って言うんですかね、神通力って超能力みたいなものに憧れてて、山を練り歩く修行にハマってるんですね。一度も神仏を見たことないみたいですが」 お凜様「目で見るんじゃない。心で感じるんじゃない」	
22		奥富「女将だけじゃなく、私や若い衆も付き合いますよ。信心はともかく、遠足だと思えば楽しめますし」 お凜様「間違いなく鍛えられるわな」	
23		奥富「で、この祭壇部屋の奥にお手洗い、その奥が浴場です」 お凜様「風呂は好きじゃ」 奥富「あいにく温泉ではないんですけどね、地下水を引いて雰囲気は味わえます。内風呂は檜造り、外風呂は岩造りになっています」	
24		お凜様「この辺の地下水じゃと、鬼姫山の霊泉につながってるかも……」 奥富「それならありがたいですね」	
25		奥富がお凜様に近づく。 奥富「このお風呂は特徴がありまして……」 お凜様「なんじゃ？」 奥富「外風呂がつながってて実質混浴なんですよ……」	

場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
26		お凜様「昔は混浴が当たり前じゃったよ」 奥富「なら気兼ねなく……」 廊下を進んでいく。	
27		客室の前に立つ。 奥富「ここが客室です。いくつかありますが、貸切なので割り振りはご自由に。インターネットは使い放題です。ゲーム機を持ち込んでも構いません。団体向けの大部屋もひとつあります」	
28		奥富「そうそう、一階の別棟に武道場がありますので、運動はご自由に」 お凜様「都合がええくらい便利じゃな」 奥富「では、これにて失礼」 お凜様「ありがとう」 奥富がお辞儀して去っていく。	
29		お凜様「とりあえず、かなちゃんときりお君はわしらと一緒におれ。他の子達は達次郎さんをお願いしたいんじやが」 達次郎「いいでしょう。大部屋を使います」	
30		お凜様「たける君は？」 たける「下に自分の部屋あるけど、一緒にいい？」 お凜様「もちろんじゃ」 お凜様が部屋に入っていく。	

場面：館内案内

番号	画面	内容・台詞	時間
31		畳敷きの和室。 お凜様達が部屋に入って、窓をから景色を眺めたり、適当に座ったりする。 お凜様「ちょっと一休みしよう。その後、熊男の対策を練ろうじゃないか」 牙吉飛丸「おう」	
32		お凜様「そうじゃ、わしが一曲吹いて聴かせよう」 お凜様が懐から篠笛を取り出す。 かんな「聴きたい！」	
33		お凜様「鬼姫山の霊竹で作った笛じゃ。こん笛の音を聴くと、どんなに傷ついた心でも癒すことができる」	
34		お凜様の美しい笛の演奏。 居合わせた皆が聴き入る。 かんな「きれい……」	
35		館内に笛の音が響き渡る。	